9．建　築　物

9－1．家の建て方

屋根の縦に走るリーカニ　rík̍aniという。リーカニの上にカヤで編んだ(テシカオ　teska'o)アクプポクンペ　akuppokunpeを敷き、その上にサクマ　sakma（押さえ木）を乗せ、さらにその上にカヤの束を、下の方には大きな束、上に行くに従って小さな束とする。

床（ゆか）はテシカ オ　teska'oしたソサモッペ　sosamotpeというゴザを地べたの上に敷き、シナの木の皮の縄を張って、その縄のうえを30cm間隔でソーラリ　sórariとかイラリ　irariと呼ぶもの（ポン　ピンニ　pon pinniをさっと焼いて折れないように曲げたもの）でとめた。

トマ　toma（ゴザ）は、火事で隣の家に延焼しそうな時に、チセキタィ　cisekitay（屋根の頂)からぶらさげ(チセ　ア　ハヨクテ　cise a hayokte)、ひもでくくり、水をかけてチセ　コル　カムィ　アシユクテ　cisekorkamuy asiyukte（家の神よ、守ってくれ）といのる。12、3才の時に、隣の家に火事があってそうしたのでよく覚えている。火事の時に近くのコタンから皆集まって手伝う。

9－2．家屋の内部構造

9－2－1．屋内の配置

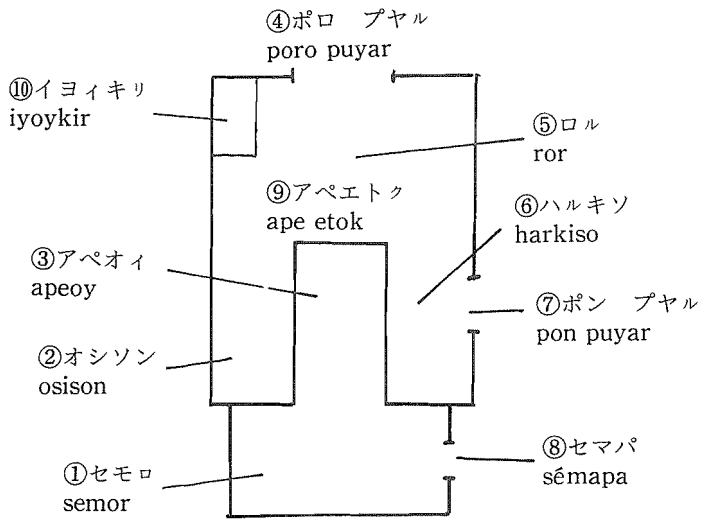
土間を①セモロ　semorという。家の外から土間へ入る入り口を⑧セマパ　semapaという。土間から屋内に入る入り口にはアパオッキ　apaotkiというスダレがさがっている。濡れた衣服などは、土間に（セモッタ　semotta）あるクマに横木を渡し、ぞうり、靴等をそこからぶらさげた（オロワ　ラッキレ　orwa ratkire)。

家には犬を三匹も四匹もあずかっていたので蚤が多かった。家へ帰り、ガンピで火を焚きつけ、まきをくべて、一度外へ出ると、すねから腰まで蚤で真っ赤になっていた。夜は、しらみがたくさんいた。目が覚めては、服の縫い目をかんでしらみをつぶしながら寝たものだ。

窓は、東の方（現在の貫気別市街が見える方角）を向いている神窓（④ポロ　プヤル　poro puyar）の他に、南の方、額平川に向いた小さな⑦ポン　プヤル　pon puyarがある。ポロ　プヤルの上の天井に穴があり、それを空窓（サラマンド　saramanto）という。カヤで編んだ薄い蓋を冬にすることもある。

寝床をエホッケイ　ehotkeyとよぶ。蚤がつかないように、柳（スス　susu）の股木で高さ70～80cmの台（アムセッ　amset）を作りその上に柳を並べる。ニーフム　níhum（丸太）を平らに切ってそれを踏み台にして寝床にあがる。

図3．荷負本村の家屋内部見取図



家の右座は、②オシソウン　osisoun とよび夫婦が座るところである。左座は、⑥ハリキソ　harkiso で息子夫婦が座るところである。横座（上座）は⑤ロル　ror とよぶ。炉に近いところ、⑨アペエトク　ape etok にはコタン　コロ　クル　kotan kor kur（村長。よそのコタンのシノニシパ　sinonispa「本当に偉い人」が来た時に座らせる。ここでは、酒を作ったり、客を招いた時には二列にして座らせるところである。

横座の右座側の隅に大事な物を置いておく⑩イヨィキリ　iyoykir があった。そこには、床の上に直接脚の付いた大きなシントコ　sintoko の上に小さなシントコを重ねて、さらにその上にパッチ　patci を置いた。これらの宝物は先祖代々伝わったもので父の代以前に買ったものだそうだ。イヨィキリの上手（ロロケヘ　タ　rorkehe ta 床の間）には、大きなオッチケ　otcike がシントコの上に置いてあり、その中にイナゥに包んだ獣の頭が入れてあった。

イヨィキリの上の壁に（イヨィキリ　エンカ　タ　iyoykir enka ta）長いイナゥが差してあった。また、刀をエムシ　アッ　emus at でさげていた。その下の床の間にはソーパウンカムィ　sópaunkamuy とシラッキカムィ　siratkikamuy のイナゥがあった。どんな神か詳しくは知らないが、ソーパウンカムィは、家の守り神（チセコルカムィ　cisekorkamuy）の事で、太い大きなイナゥである。シラッキカムィは、山の生き物の神で床の間に置いてあったオッチケの中の獣の頭がその神様のようだが、私は女であるから、くわしくはわからない。

横座の左座に近いところに天井からトマ　トゥナ　toma tuna を子供の手が届くくらいの高さまでぶらさげて、その中にトマなどの敷物を保管しておいた。ねずみにくわれないように、壁（チセ　トマム　cise tomam）からすこし離して置いた。

左座の戸口に近い所（アパサム　タ　apasam ta）にトゥナ　スワッ　tuna suwat を壁に渡したクマ　kumaにかけてそれに鍋をかけておく。庖丁（ホィチョ　hoyco）は、箱にいれてひもでとめておいた。

トマ　toma はキナ　kina ともいう敷物のゴザのことである。寝る時に、これを敷き布団として何枚も重ねて敷く。上に布団として長いのを一枚、かぶり、その上に四つ折りにしたものを上半身と下半身にかけた。

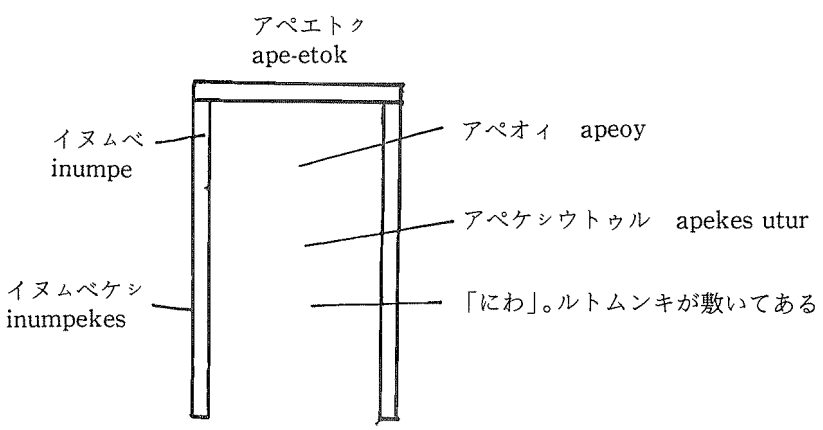
トマは、編み終わりの部分にひもが付いており、そこが頭（サパ　sapa）で、反対側が尻（オソロ　osoro）である。右座では、トマの頭を横座（上座）の方に向けて敷く。トマは、二間半の長さ、三尺の幅で、織りあげるのに5日くらいかかる。弟の妻（マチヒ　macihi）も作って売ったりしている。

ニカプンペ　nikapunpeは、模様のついた敷物でトマよりも幅があり、長い。特に、熊送りに用いるものをイナゥソ　inawsoといい、横座のアペエトクにニカプンペをエピッタ　epitta（一面に）敷き、そこでイナゥケ　inawkeしたり、熊の頭を置く（マラプト　アン　marapto an）。この、イナゥソには、男のみが座り女はねまる（座る）ことができない。また壁（チセトマム）に張るニカプンペもある。床にニカプンペを敷く時、トマの上に敷く。客が来た時に、シムシシカ　simusiska（咳ばらい）したら外に見に出た女が後ずさりして戻る。家内の者がムン　ヌパ　mun nupa（ごみを掃き出せ）とか、ソ　カル　ヤン　so kar yan（座を作れ）と言っていると、今、座を整えているんだな（ソ　アヌ　フミ　アシ　so anu humi as）と客は思う。

9－2－2．炉について

炉を③アペオィ　apeoyという。炉ぶち木（イヌムベ　inumpe）は三本で戸口側があいている。昔の炉は長い木をくべるのでかなり長かった。炉ぶち木の神窓側をアペエトク　apeetokとよぶ。ここには、客として来た他の部落の偉い人（シノニシパ　sinonispa）たちが座るところである。夜になると子供達がこの辺にエホッケ　ehotke（寝る）する。

図4．炉の構造



炉の神窓側にイヌムベサウシペ　inumpesauspe が左右にある。

炉の上手（すなわち、額平川上流で、東側）に神窓（ポロプヤル　poropuyarあるいは、ロルンプヤル　rorunpuyarとも呼ぶ）がある。この神窓の外に祭壇（ヌサ　nusa）がある。

炉の戸口に近い所をアペケシウトゥル　apekes'uturと呼び、炉縁木の端をイヌムベケシ　inumpe-kesという。お産がある時、日常の火とは別に新しい火をたきそこで産湯を沸かしたり、おかゆをたいたりする。お産の床は、右座につくる。よその家から取りあげばあさんが来て、一週間、

母親とあかんぼうの世話をする。(6－5－2参照)

アペケシウトゥルには、アペキライ　apekiray(火の櫛)と呼ぶ道具があり、これで炉内のごみをアペケシウトゥルまでもってきてあつめる。

そのアペケシウトゥルから一段低くなったところが庭で、そこにルトムンキ　rutomunkiというカヤで編んだトマ　toma（ムシロ）が敷いてある。そこから、戸口になっていて、戸口にはスダレ（アパオッキ　apaotki）がかけてあり、土間（セモロ　semor）に続く。土間の入り口（セム　アパ　sem apa）にはスダレがかかっていない。

炉の上にスワッ　suwat（炉かぎ）が下がり、その上に火棚（トゥナ　tuna）があり、オニガヤで作ったアプッキ　aputkiが敷いてある。これはイサッケキ　isatkekiとかイサッケ　アプッキ　isatke aputkiともいう。大きく切ってサカンケ　sakanke（干すために煮る）した鹿の肉（ユク　カム　yuk kam)、即ちサカンケ　カム　sakanke kamをあげておく。

小さい時、粉の団子（シト　sito）のたべあましたものをイサッケキにあげておき、乾いたものを埋め火（トゥナ　アペ　tuna ape？）しておいたところのあく（灰）の中に入れてやわらかくなったものを食べたものだ。

ヒエ、アワは、肉等を干していないときに、アプッキにあげてほした（キオリオ　kiorio)。

魚は梁（イテメニ　itemeni）に渡した干し竿（サキリ　sakir）に干した。サキリへの上り下りには丸太に段を刻んだニカラ　nikar（はしご）を使った。

9－3．屋外の構造

便所は、家に近い方の男便所をアシンル　asinru、女便所をメノコル　menokoruという。どんなにあせっても異性の便所を使うことはない。

神窓（ロルンプヤラ　rorunpuyar）の外に祭壇（ヌササン　nusasan）がある。